

## 「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の構築と運用可能性

加藤大鶴<sup>かとうだいかく</sup> (跡見学園女子大学)、石山裕慈<sup>いしやまゆうじ</sup> (神戸大学)、  
佐々木 勇<sup>ささき いさむ</sup> (広島大学)、高田智和<sup>たかだともかず</sup> (国立国語研究所)

## 1 はじめに

発表者らは、日本漢字音の歴史的研究に資するデータベース（以下 DB）を作成中である。漢字音・漢語音研究においては個別具体的な文献資料に基づいて高度な成果が生み出されてきたが、多様な研究成果を横断的に見通して俯瞰的な視点から整理し新たな研究領域を見いだす動きには乏しい面があった。そこで本研究では、(1) 漢文直読・訓読資料、和化漢文資料、和文資料など文献資料の位相差による漢字音・漢語音の位相的多様性、(2) 単漢字単位と漢字連接単位という異なる単位における字音の単位的多様性、(3) 中国語原音およびそれを受容した日本語社会における平安・鎌倉期から近世期までの字音・漢語音韻史の通史的多様性、の三つの多様性を俯瞰的な視点からの整理に必要な観点と見定め、DB の設計を行った。

本発表ではこの DB に関わる三点を報告する。第一はこの DB を構築するにあたっての設計意図と特性、経過報告である。第二は DB を仮運用した結果見えてきた、漢字音・漢語音研究における活用の可能性についてである。第三として最後に、DB 設計上の課題等を述べる。以下、順に論じてゆく。

## 2 データベースについて

本 DB は、字音資料の作成年代やジャンルを横断して漢字音・漢語音を記述できるよう簡便な構成とした。データ項目は以下の 16 項目である。

- (1) 資料番号：資料 ID    (2) 資料内漢字番号：漢字の資料内出現順の通し番号    (3) 資料内漢語番号：漢語の資料内出現順の通し番号    (4) 単字：音注が付された漢字    (5) 漢語：音注が付された漢字を含む漢語    (6) 漢語内位置：漢語内での単字の位置。例えば 1 文字目ならば” 1”。
- (7) 単字長：単字の拍数    (8) 声点：単字に対する四声（平上去入）、六声（平平輕上去入輕入）及び清濁    (9) 声点型：漢語に対する声点の組合せ。声点がない単字については 1 で表す。
- (10) 仮名注：仮名表記による字音注（仮名反切を含む）    (11) 仮名型：漢語に対する仮名注の組合せ。仮名注がない単字については \* で表す。
- (12) 反切：単字に対する反切注    (13) 類音：単字に対する類音注    (14) その他：声点、仮名注、反切、類音以外の音注    (15) 出現位置：資料内の単字・漢語の所在
- (16) 備考：注記すべき事柄

主な入力ルールは次の通りである。

- (a) 漢字は Unicode で入力し、Unicode で表現できないものは  $\equiv$  で表す。また、虫損箇所は  $\square$ 、判読不能箇所は  $\blacksquare$  で表す。
- (b) 一つの単字に対して声点、仮名注、反切、類音がある場合、/ で区切って入力する。朱筆は [朱]、左傍は [左] を添える。

データベースでは、個別資料のデータと全資料を統合したデータと 2 種を提供する（データ形式はエクセル）ほか、書誌データも公開する。公開サイトの URL は <http://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/kanjionDB/> である。2021 年 5 月現在、23 資料を試験公開している（表 1）。

表 1: DB に格納する資料一覧とデータ数 (2021 年 5 月現在)

資料番号	資料名	諸本	資料の種類	時代	単字数
20-001-01	大般若波羅蜜多經	根津美術館蔵本	漢文直読資料	平安	14313
20-002-01	医心方	半井家旧蔵本	漢文訓読資料	平安	2917
20-002-02	医心方	仁和寺本	漢文訓読資料	平安	359
30-008-01	遊仙窟	金剛寺本	漢文訓読資料	鎌倉	668
30-008-02	遊仙窟	醍醐寺本	漢文訓読資料	鎌倉	749
30-010-01	觀經・阿弥陀經集註	西本願寺	漢文訓読資料	鎌倉	9065
30-011-01	浄土論註	西本願寺	漢文訓読資料	鎌倉	513
30-012-01	群書治要	金沢文庫本	漢文訓読資料	鎌倉	3868
30-013-01	尾張国郡司百姓等解文	早大本	和化漢文訓読資料	鎌倉	502
30-013-02	尾張国郡司百姓等解文	東大本	和化漢文訓読資料	鎌倉	564
30-013-03	尾張国郡司百姓等解文	真福寺本	和化漢文訓読資料	鎌倉	124
30-015-01	浄土三經往生文類	西本願寺	和化漢文訓読資料	鎌倉	536
30-018-01	三帖和讃	専修寺	和文資料等	鎌倉	4137
30-019-01	一念多念文意	東本願寺	和文資料等	鎌倉	1764
30-020-01	尊号真像銘文	略本	和文資料等	鎌倉	2471
30-020-02	尊号真像銘文	広本	和文資料等	鎌倉	4644
30-021-01	西方指南抄	専修寺	和文資料等	鎌倉	20090
30-022-01	唯信鈔文意	正月 11 日本	和文資料等	鎌倉	1836
30-022-02	唯信鈔文意	正月 27 日本	和文資料等	鎌倉	1963
30-023-01	唯信鈔	ひらがな本	和文資料等	鎌倉	46
30-023-02	唯信鈔	西本願寺本	和文資料等	鎌倉	1576
30-023-03	唯信鈔	専修寺本	和文資料等	鎌倉	1883
50-029-01	浄土三部經音義	龍谷大学本	和文資料等	室町	1444

### 3 漢字音と漢語音に関わる DB の活用

#### 3.1 漢語の認定にかかわる困難

漢字音から日本語としての漢語音形成に目を向けるとき、まず漢語の認定自体に困難を感じる時がある。漢字が臨時的な造語性に優れているために、それが安定した一語なのか臨時的な漢字の連接に過ぎないのかが直ちに分からないのである (岡島昭浩 2009:113-114、林四郎 1982)。このようなとき、形態音韻論的な事象に着目して漢語を認定することが有効となる場合がある。例えば、(1) 単字声調の組み合わせが日本語として安定的なアクセント型に変化していること (石山裕慈 2008 他、佐々木勇 2009:研究篇第二部、加藤大鶴 2018:第 3 章)、(2) 入声字が後続する無声子音の影響で促音として実現すること (小松英雄 1959)、(3) 連濁現象、特に俗に「ウムの下濁る」で知られる Post Nasal Voicing、漢字音研究でいう「新濁」などである。本節では (3) について DB を用いた分析例を掲げることとする。

### 3.2 鼻音韻尾字に後接する連濁

いま DB から後項に「生」を有する 2 字の漢字連接を選び、さらに声点の付された例を抽出する。これらを、前接字の韻尾情報によって分類し、非濁声点と濁声点の数を調べたものが表 2 である（数字は異語数（ ）内は延語数）。

前接字	「生」字の声点と語例	非濁声点	濁声点
零韻尾	去・上声点：意生、下生、化生、後生、四生、所生、無生 上声点：衆生	8(10)	1(1) 1(24)
母音韻尾	上声点：来生	1(1)	
入声韻尾	去声点：一生、欲生、攝生 平声点：蜀生	3(8) 1(1)	
鼻音韻尾	去・上声点：往生、群生、今生、生生、誕生、能生 平声点：安生、更生	1(1) 2(2)	5(26)

表 2 後項に「生」字を有する 2 字漢語の連濁例

DB 上から抽出されたのは院政期～鎌倉期の資料（20-001-01 根津本『大般若波羅蜜多經』、20-002-01 半井家旧蔵『医心方』、30-008-02 醍醐寺本『遊仙窟』、30-011-01『浄土論註』、30-018-01『三帖和讃』、30-020-01『尊号眞像銘文(略本)』、30-023-02 西本願寺本『唯信抄』、30-023-03 専修寺本『唯信鈔』）であるから、院政期～南北朝期に鼻音韻尾字に後接する場合に連濁が生産的に行われたという知見（沼本克明 1986:249）が、ここでも確かめられる。一方、前接字に零韻尾を持つ「衆生」でも連濁が生じていること、逆に鼻音韻尾字であっても漢音と推測される「安生」「更生」では連濁が生じていないことも分かる。語彙的な事情や字音形等の関与も伺われる。奥村三雄 1952、江口泰生 1993、佐々木勇 1998 他を踏まえ改めて考えねばならない問題である。

### 3.3 連濁の位相差

このような連濁現象は資料位相上どのように現われるだろうか。表 3 では鎌倉期の資料を「漢文訓読・直読資料」「和化漢文訓読資料」「和文資料等」に分類し、2 字連接の後項に声点の付され

資料位相の分類	被差声字	濁音表示	連濁
A 漢文訓読・直読	768	110(14 %)	7(1 %)
B 和化漢文訓読	190	54(28 %)	20(11 %)
C 和文等	1580	698(44 %)	245(16 %)

表 3 資料位相ごとの 2 字漢語の連濁例

た字数とそのうち濁声点だったもの、さらに連濁と認められたものを延数で示した（（ ）内は被差声字に対する％）。すると A～C にかけて連濁と認定できる率が増加することが見て取れる。この傾向が表記上、発音上のいずれに起因するかはここでは分析する準備がないが、連濁に関わる位相上の違いが存在することは本 DB によって観察することができる。

## 4 日本漢字音・漢語音の位相論的研究について

日本漢字音・漢語音の位相論的研究は、沼本克明 1986・佐々木 2009 などで行なわれている。これらの先行研究によって、同時代であっても、字音直読資料とそれ以外（漢文訓読資料・漢字片

仮名交じり文)、また、漢籍訓読資料と日本漢文訓読資料、あるいは、『色葉字類抄』と『類聚名義抄』のような辞書と字書とにも、漢字音の差が存したことが以下の項目について指摘された。

- 単字の音形変化 1. イ (/i/) とヰ (/wi/)、エ (/e/) とヱ (/we/) との同一化 2. キ (/ki/) とクヰ (/kwi/)、ケ (/ke/) とクヱ (/kwe/) との同一化 3. スヰ ([swi])・ツヰ ([twi]) 等の音について 4. 連母音の統合 5. p 韻尾字における閉促性の弱化 6. m 韻尾と n 韻尾との同一化 7. ng 韻尾字における鼻音の弱化 8. 舌内入声音の多様な発音
- 連音上の音形変化 9. 入声音の促音化 10. 連濁<sup>れんだく</sup> 11. 連声<sup>れんじょう</sup>
- 単字の声調変化 12. 拍内上昇調の高平調化 13. 拍内下降調の消滅
- 連音上の声調変化 14. 上昇調＋上昇調→上昇調＋高平調、高平調＋上昇調→高平調＋高平調

これら、漢字音の変化として指摘された早期の例は、『将門記』楊守敬旧蔵本平安後期点・同真福寺本承徳三年(1099)点・興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』院政期点などの漢文訓読資料や、『法華百座法談聞書抄』天仁三年(1110)写本などの漢字仮名交じり文の用例であった(沼本克明 1986・小林芳規 1971-03)。

本データベース中にも、院政期の漢文訓読文に、以下の例が見られる。

1. エ (/e/) とヱ (/we/) との同一化

半井家旧蔵本(東博蔵本)医心方 1145 年点 怨親<sup>エム</sup> (0102a3) 獼猴<sup>エンコウ</sup>(平) (2204b6)

しかし、鎌倉時代中期の書写ながら、院政期の訓点を反映すると考えられる漢文音読資料 20-001-014『大般若波羅蜜多經』には、上の例は無い(佐々木勇 2018)。

5. p 韻尾字における閉促性の弱化 9. 入声音の促音化

半井家旧蔵本(東博蔵本)医心方 1145 年点 妻妾<sup>サイセウ</sup> (0104a5)

しかし、半井家本医心方においても、他 26 例の p 韻尾字は「一フ」で表記されている。従来の研究では、変化形は指摘されるものの、それ以外の例を知ることが難しかった。

なお、20-001-014『大般若波羅蜜多經』でも、「一フ」168 例、「一ウ」33 例と、p 韻尾に「ウ」を宛てた例が 33 例有る。この、閉促性が弱化していたと考えられる「ウ」表記例は、句頭では 3 例のみで、いずれも促音化例とは考えられない(促音環境の例は、平声点が加点された「獵<sup>レウ</sup>(平)[ママ] 師惡獸<sup>シヨ</sup>(平)」(0549a05)のみである)。

一方、「一フ」の句頭例は 15 例で、内 13 例は無声音が続く促音化環境にある。たとえば、「獵<sup>レフ</sup>(入) 師」3 例は、促音化していたと考えられる。

すなわち、[ɸu] と [q] とを同じ「フ」で表記していたと考えられる。

「獵師」は、本データベース公開予定の三卷本『色葉字類抄』前田家本に、「獵<sup>レフ</sup>(入) 師<sup>シ</sup>(平) (1/095b/3)・同黒川家本に「獵師<sup>レウ</sup>〔右傍〕フシ」(中 013b/2)とある。[ɸu] あるいは [q] が規範的な語音、[u] が日常口語的な語音であろう。

本データベースは、上のごとき考察を可能とするため、当該字を含む「漢語」と当該字の「漢語内位置」とを示す。さらに、「単字長」を拍数で示す計画である。

## 5 字音仮名遣いの検証と発展的問題

### 5.1 従来指摘されてきた問題点と現状

江戸時代の字音仮名遣い研究では、江戸時代の音韻に基づいた形が採用されたほか、『韻鏡』などに基づいた演繹的な研究手法が採られ、架空の形が導き出されるなどの弊害があった。それが現行の漢和辞書にも受け継がれていることを、沼本克明 2014 などが問題視したところである。

近年、実際の文献資料に基づいて字音仮名遣いを確定するとともに、凡例にもそのような方針を明記する漢和辞書が増えてきている。しかし文献上に出てくる形を重視した結果、今度は 1 字に対して複数の字音仮名遣いが記載されるものも見受けられるようになった。「仮名遣い」の趣旨に従うと、1 種類にまとまるのが本態と思われるところである（石山裕慈 2013）。「字音仮名遣い」というものを定義し直すとともに、個々の字音の特定に際しては、まずは古い時代の実態を探り、その中から合理的な形を絞り込んでいくという手順が妥当なものと思われるところで、本 DB の活用法の一つとして期待できる。

### 5.2 具体例

用例数を増やすことによって、字音仮名遣いが絞り込まれていく一群がある。例えば豪韻字の字音仮名遣いは、呉音漢音に関わらず唇音字はオ段＋ウ、それ以外はア段＋ウが原則であるが、袍・抱のみはハウがもっぱら現れることが、有坂秀世 1942 で指摘されている。有坂が指摘する前田本『色葉字類抄』の例のほか、本データベースでも「懷抱（ハウ）（30-008-02 醍醐寺本『遊仙窟』）」「抱（ハウ）朴子（30-011-01 親鸞『浄土論註』）」などの例が拾えるのであり、やはり袍・抱はハウと認定すべきであると思われる。

その一方で、文献資料に現れる形が一定せず、候補が拡散されていく一群も存する。一例として、仏典に現れるシュ／シウ／シユウ（濁音も含む）を例に取り上げる。鎌倉時代以前の様相を本 DB で分析すると、次のような結果が得られた。基本的にシュと認定すべきと思われるが、注意すべき現象もある。

資料	シュ	シウ	シユウ
30-018-01 『三帖和讃』	21 字 105 例	2 字 6 例	なし
30-021-01 『西方指南抄』	28 字 787 例	6 字 10 例	なし
20-001-01 『大般若波羅蜜多經』	35 字 193 例	3 字 20 例	6 字 15 例

表 4 仏典に現れるシュ／シウ／シユウ（分析結果の一部）

- -ŋ 韻尾に関係なく、シュとするものが多数である（表 4 参照）
- 親鸞は宿をシウとする（「宿善」「宿因」）。州もシウだが、中国の地名として頻出する字であり漢音か
- 20-001-01 根津本『大般若波羅蜜多經』では洲はシウ（「作洲渚故（4 例）」「為洲為渚（2 例）」など）、充をシユウとする（後掲親鸞資料との違いに注意）
- 訟や鍾のウ段形は呉音と思われるが、『大般若波羅蜜多經』ではシユウとする
- 『大般若波羅蜜多經』では「衝撃」「随意答酬」がシュ・シユウ双方で現れる。「禽獸」はシ

ユ・シウ双方で現れる。腫（シユ／シユウ）・愁（シユ／シウ）も、両形が現れる字である

- 「充滿」は親鸞（シユ）と『大般若波羅蜜多經』（シユウ）とで食い違う

## 6 おわりに・課題

本発表では「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」の設計意図と特性について報告するとともに、DBの仮運用を通じて研究上の活用可能性について論じてきた。研究者が自身の研究目的のために作成してきた、それぞれに載録方針の異なるデータを統合するためには、各注記の認定方法のすりあわせ、記載方法の統一などの困難があった。資料の性格自体が異なることに由来する困難があったことも言うに及ばないことである。時代が古い資料であれば漢字音を単位とした注記が多く、逆に時代が下れば漢語音を単位とした注記が多く、それらをDB上でどのように調整するかという問題等も残る。

しかし、横断的なDBによって当該研究領域に対して俯瞰的な視点が得られるメリットは大きいものと考えられる。今後も資料の拡充と入力データの整備と正規化を進め、さらにDB活用の可能性について検討を行う予定である。

### （参考文献）

有坂秀世 1942『『帽子』等の仮名遣について』（『文学』9-7、『国語音韻史の研究（増補新版）』（三省堂、1957）所収）

石山裕慈 2008「貞享版『補忘記』の漢語アクセント」国語と国文学 85-3

石山裕慈 2013「『字音仮名遣い』の現状と提言」（『弘前大学国語国文学』34）

江口泰生 1993「漢語連濁の一視点—貞享版『補忘記』における—」（『国語国文』62-12）

岡島昭浩 2009「漢語から見た語彙史」（『シリーズ日本語史 2 語彙史』（岩波書店）所収）

奥村三雄 1952「字音の連濁について」（『国語国文』21-5）

加藤大鶴 2018『漢語アクセント形成史論』（笠間書院）

小林芳規 1971-3「中世片仮名文の国語史的研究」（広島大学文学部紀要・特輯号 30 巻 3 号）

小松英雄 1959「舌内入声韻尾と促音との交渉」（『言語と文芸』2、『日本声調史論考』（風間書房、1971）所収）

佐々木勇 1998「三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁」（広島大学学校教育学部紀要第 II 部 20）

佐々木勇 2009『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（汲古書院）

佐々木勇 2018「根津美術館蔵春日若宮『大般若波羅蜜多經』の字音点について」（『歴史言語学の射程』〈三省堂〉所収）

沼本克明 1986『日本漢字音の歴史』（東京堂出版）

沼本克明 2014『帰納と演繹とのはざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず』（汲古書院）

林四郎 1982「臨時一語の構造」（国語学 131、『漢字・語彙・文章の世界へ』（明治書院、1987）所収）

\*本発表は「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」（2019～2021 年度科学研究費助成事業・基盤研究 C・研究課題番号:19K00650）の一部である。